
白夜とリコー達がたどる道

2 ツノ心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜とリコー達がたどる道

【Nコード】

N0515D

【作者名】

2ツノ心

【あらすじ】

大人達の戦争に巻き込まれた2人の少女がいた。2人とも親や兄弟と、生き別れてしまった。そして、戦争が終わり、大人になった2人は世の中を旅をしてく。旅先ではいろいろな人と出会っていく。

第1話 プロローグ（前書き）

はじめまして。

2 ツノ心と言います。初めて投稿する小説でとても緊張しています。
評価をよろしくお願いします。

第1話 プロローグ

プロローグ

広大な砂漠に囲まれた街がある。人々が憩いを求める街だ。しかし、今は真黒な煙が街のいたるところで空にむかってたち昇っている。

黒い煙の合間から見える蒼い空には、幾重の機影を残して戦闘が繰り返されている。戦闘の合間には爆弾が、地上を襲う。

地上で爆弾が炸裂するたびに、人々の叫び声が無かったかのように消されていく。石造りの家に爆弾が当たると、大きな塊となり逃げ惑う人々を容赦無く襲う。

人の姿がまばらになった通りには大きな穴がいくつも開いている。道の傍らには、大小のガレキが無惨な姿で散らばっている。

そんな中を、4才ぐらいの少女が泣きながらさまよっている。

「おとーさん。おかーさん。どこー」

少女の叫びは遠くまで響いている。

しかし、はぐれてしまった父と母の返事はない。聞こえてくるのは、戦闘の音だけだ。

「おとー」

少女がもう1回叫ぼうとしたとき男の大きな手が彼女の口をおさえた。

男の人は少女の口をおさえたまま脇に抱え上げ、通りから細い道へ連れ去ってしまった。

細い道は曲がりくねって迷路になっている。いくらか進むと、地下へ行く階段が見えてきた。男の人は少女を抱えたまま、その階段

を降りて行つた。

地下には、多くの人が避難している。男の人は脇に抱えてた、少女を地に降ろした。

1人の女の子が、安心してしまった少女に近づいて来た。そして、柔らかい声で少女を労った。

男の人は大人と話し合っている。そして、大人の1人が、意を決した顔でここにいる人に聞こえる小さな声で何かを言った。

そして、ここにいる人達が、男の人を残して地下の奥へ消えて行つた。

第2話 始まり 1節

乾いた暑さが、小さな食堂の中にたちこめている。小さな窓からは、淡い赤色の光りが、射しこんでいる。

そんな食堂の中に、赤い髪をした1人の女性が、丸太みたいな椅子に座っている。女性の左手には、酒の入ったガラス瓶を持っている。

そして、女性は左手に持っている瓶を、木のテーブルに置いてある小さな色ガラスのコップに注ごうとしている。

「リコー姉さん、また、酒を飲もうとしているんですか」

どこかから、少女の冷たい声が、響いてきた。

女性が、食堂の入り口を見ると、栗色の髪をした少女が立っている。少女は仕事帰りなのか、麻で作られた半袖と、半ズボンの仕事着を身につけている。

「いや、違うよ。そろそろ白夜^{よひ}が、帰ってくると思って、夕食の準備をしようとしていたんだよ」

リコーと、呼ばれた赤い髪の女性は、驚きを隠そうと早口でまくし立てた。

その間に白夜と、呼ばれた少女はテーブルに近寄ってきた。

「じゃあ、テーブルの上にあるお菓子が、今日の夕食ですか？」

白夜は、テーブルに乗っている高そうなお菓子を見回してから言った。

「うん、そうだよ」

白夜は、リコーの言い分が終わるや否や、テーブルを烈しく叩いた。叩いた衝撃で、テーブルに乗っているコップやお菓子が、小さな音を奏でた。

普段、温厚な白夜の顔は、怒りのあまりに真っ赤に染まっている。

「うん、そうだよ、ではありません！ここに広がっている物は誰が、賄っているかと思っているのですか？」

そして、姉さんが、今年の初夏に、仕事を辞めさせられてから、誰がお金を稼いでいるのか分かっていいるのですか！」

白夜は、1通り言い終わると、肩で荒くなつた息を整えている。静かな空気が、暗くなつてきた食堂を包んでいく。耳に入ってくる音は、白夜の荒い息遣いだけだ。

「明日、仕事でも探しに行くか」

静寂を破つたのは、今まで黙っていたリコーだ。

「え？」

まだ、息が上がっている白夜は、混乱の声をあげた。

「だから、明日、仕事を探しに行くよ」

リコーは、今まで叱られていなかったかのように言った。

白夜は、何を言ったらいいのか、死にかけている魚のように、口を開けたり、閉じたりを繰り返している。

「それでは姉さん、私もついていきます」

白夜はやっこの思いで、口から出てきた言葉を結んだ。

「それじゃー、お菓子をなくそうよ」

リコーは楽しんでいる声で言った。

白夜は渋い顔をして、空いている丸太の椅子に座ってお菓子を食べ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0515d/>

白夜とリコー達がたどる道

2010年10月10日00時05分発行